



新病院長の紹介

社会保険大牟田天領病院



院長
興 柁 博次

本年四月一日に社会保険大牟田天領病院の院長に就任致しました。これまで、熊本大学で診療、研究、教育に従事させていただきましたことに深く感謝申し上げます。また、肥後医育振興会でも大変お世話になりました。

大牟田天領病院は、明治二十二年に三井炭鉱の診療所として開設され、発展してきましたが、平成十四年に三井炭鉱の閉鎖に伴い福岡県社会保険医療協会に加入し、三井大牟田病院から大牟田天領病院に改称して今日に至っています。現在、創立一八八年になる歴史のある病院です。この四十年では、熊本大学を中心に医師の派遣をいただき、院長として、奥園先生、大平先生、荒木先生、杉本先生がリードされてきました。

本院は、大牟田・荒尾・長洲を含む有明地区を中心とした診療圏として、一般病床、地域包括ケア病棟、回復期リハビリテーション病棟にて成り立ち三三九床で診療しています。本院の理念である患者中心で質の高い医療を実施し、地域と一体になった医療システムを確立し、安心と信頼が得られる病院に育てることを目指しています。医師は、熊本大学の消化器外科、整形外科、神経内科、腎臓内科、代謝内科、皮膚科、小児科、

放射線科、循環器内科、消化器内科、呼吸器内科からご支援をいただき、脳神経外科、泌尿器科、リハビリテーションにも常勤医師を配置して、総合的に診療を展開しています。現在、スタッフ全員が生涯教育を心がけ、常に改善を目指して努力を続けています。熊本大学ならびに肥後医育振興会の皆様からのご助言、ご支援を宜しくお願い申し上げます。

大牟田は、ご存知のとおり石炭の産出で繁栄した町です。大牟田駅の一番ホームには黒光りする最高級の石炭が展示されています。樹木の化石としても大変貴重な品ですし、それが燃料や化学製品になりますので畏敬の念を感じざるをえません。私が考えている石炭の魅力を職員の方にお話をしましたところ、黒光りの石炭をプレゼントいただきました。今、その石炭は、院長室に飾られています。数千万年以上にわたり地下深い場所で熟成され、化石として採掘されて、現在、私の仕事を監督しています。大牟田・有明地区の皆様のために広く貢献するように見守って貰うつもりです。

本院は、三井炭鉱の事業所病院でもありましたので、今もゆつたりしているところがあります。また、新しい診療システムが十分に浸透していない部分もありますので、創立一三〇周年記念事業を立ち上げ、二〇一九年までには最新のシステムで運営できる歴史ある病院に衣替えをして、職員にも有明地区市民にも誇りとなる病院に育てる所存です。

今後とも、肥後医育振興会の皆様には、大牟田天領病院にご助言、ご指導をよろしくお願い致します。

国立病院機構熊本医療センター



院長
高 橋 毅

この度、平成二十九年四月一日付で院長に就任致しました、高橋毅と申します。河野文夫前院長の方針を受け継ぎ、熊本大学の先生方と共に地域医療の一翼を担って行く所存でございます。どうぞご支援を賜りますようお願い申し上げます。

私は、昭和五十三年熊本高校、昭和六十年に宮崎医科大学を卒業し、熊本大学医学部代謝内科に入局致しました。当時は鶴沢春生教授の最後の時代で、小ぢんまりとして、ほのぼのとした暖かい医局でした。疾患の特性上、救急対応も無く、のどかな研修医一年目を過ごしました。唯一の苦痛は、毎週月曜日の午前中に鶴沢教授と研修医だけでHarrisonの抄読会が開催されていたことです。鶴沢教授は海軍のご出身で、東京大学工学部造船学科を経たのち九州大学医学部に進まれていましたので、抄読会の途中に、その思い出話で脱線して終わる、ということがしばしばありました。そこで我々研修医四名は結託して、抄読会を脱線させる計画を練りました。毎週順番で話題をそらす担当を決めておいて、予習した英訳範囲が尽きてきた頃になると、担当が「昔は、この疾患の診断はどうしていたのですか？」とか「船の上ではどのような治療をしていましたのですか？」などと話を振ると、決まってその後は一時間くらい教授

の思い出話が始まって抄読会が終わる、というのを毎週繰り返していました。何故か毎週毎週、見え見えの同じ手口に教授が引っかかるのが不思議でたまりませんでした。とても優しい教授でした。

その後、私は昭和六十三年から熊本大学大学院に進学しましたが、代謝内科教室は一変してしまいました。昭和六十二年九月から新教授の七里元亮先生が赴任されたのです。多くの方々がご存じのように、この世の中で最も怖い先生でした、いや、「恐い」の方が相応しいと思います。教授就任時の医局員への訓示は、「アクティブな和」がモットーである、とのことでした。しかしながら私は教授からの覚えが悪く、会話することや教授室へ出入りすることも許されませんでした。たとえ廊下の端に教授の姿を見つければ、すぐに直立不動になり、ご挨拶しても無視して通過されていました。その状態は正に「アクティブな和」状態であり、大学院修了は無理だろうと思っていました。ところが、実は私の知らないところで学位論文の件で骨を折って下さっており、表向きからは決して想像すら出来ませんでした。裏では、とても面倒見のいい、部下思いのやさしい教授でした。学位取得後すぐ、平成四年七月に国立熊本病院の循環器科へ三年間の御礼奉告ということで派遣されて、早や二十五年が経過しました。

当院は、ほとんどの診療科を熊本大学からお世話になり、当院で初期研修を終えた研修医は、その多くが熊本大学にお世話になっていきます。今後とも引き続き、人事、診療、教育、研究、運営など、多方面にわたりご指導ご支援賜りますようお願い申し上げます。